

狂乱、妄想

小山 健

知識に焼き払われた頭の内
その空洞の中を 銀貨が落ちる
一条の閃光の音
すると

砂漠の感情が憑依する
砂の一粒一粒

目玉を震わせ鼓動する
そこから

無制限の情報が流入する
肥大化する意識

思念と想念の枠は砕かれ
生命のからくりがネジを失う

アイスピックで武装した 映像また映像に
感染した瞳の奥で

月桂樹の香りを振りまきながら舞う
盲目の女

一刻一刻
その小麦色の肌が 舐めるように迫る

木靴の踏むステップが
どこかの門の扉を

軋ませる

雑踏とハイヒールの棘に 踏み荒らされたこめかみに
土星の息がかかる
惑星の記憶が流れこむ

海の底で凍結されていたような
冷たい歴史

すると

血が騒いで血管が膨れ

過去のすべてが放擲されるような感覚
逃れる術のない 満身創痍の呪縛

頭脳が混濁する

その泥水が煮えたぎっている

絶間なく声をあげる

気泡

蜃気楼のような煙にかすむ

泥水の底で生まれ

失われる

その度 生の地図が欠損する

灯をとりまく闇が

重くなる

堅固な肉体の隙間から

意識は別天地を仰ぐ

灯が小刻みに痙攣し

煙となる その瞬間の予感が

樹影のように

優しくつきまとう

小屋

小山 健

日々は狂乱の焰に舐めつくされ
だが時折 意識の氷上に鳴り響く
君の呼吸

茫漠とした朝霧のように拡がる その音
明確な人物画のリンカクも
滲む

無慈悲な鉄の光沢も
仄かな紅をおびる
鉄格子に吠えたてる罪人も
浮き立つ血管をおさめる

血の中を
小鳥が囀りながら 遊泳する
君の響き
鼓動が二つに分かれる

雑居ビルの天辺から 一緒に
雲間の小麦色をめざして
歩こうか
宇宙と空の境界 そこに
小屋を建てよう
吊り下がるランプの灯は
いかなる言葉も可能にする
オリンポスの神話も 数式のような隠語も

今 公園から寄せられる
風に背負われた漣
ほんの二、三の遊具を軋ませる
無垢な乱舞
電線が揺れていて
一片の羽毛

物事のすべては
君をめぐる額縁
あるいは
見渡すかぎり君のメタファー

今朝の夢……
王冠の印のついた細い煙草
極楽鳥の嘴 葡萄酒とココア
大理石の床に落ちた薄絹
みんな君自身だ
フロイトも心理学も不要
意識の流れは
君の重心へ向かってうねっている

分厚い濃紺の書物が 町の灯に降りようとする
君が大きくなる
形象を失わせる夜 それは
乳房をさらけ出した君の素肌

棺

小山 健

その晩 月は紅く

風は しまい忘れた風鈴を舌で鳴らす

個室から漏れる喘ぎ声

客引きの丁寧語……

夜の胎内で 哀音となる

世は不毛だと嘆く者の耳には

その響きはきつと

遠くの鉄橋の燐光のように

貴重だろう

ネオンは暗さを秘めている

それは

周囲の闇にあやされている

夜気にぶらさがっている乳房に

吸いついているのだ

明かりから明かりへと

運ばれてゆく 夜更け人

真実を探し求めて

己を喪失したかのような人々

彼らは顔を失っているかもしれない

そして瞳は

体の内側を凝視し 鼓動に慄いている

どこかで 寝台が軋んでいる

事を終えたら 無言のまま

二つの身体は離れるだろう

片隅で 煙草の先端が紅くなり
片隅で 扉のしまった音が乾く
シャツの上で 汗が根を生やす

高架線を 最終列車が走り去った
記憶の表面が剥離した

と 謎であり続けた事の真意が

微かに薫った

刹那の黙示

驟雨に晒されればいい

灯りは消失し

可能性は飛散する

そして

ただ一つの真実が飛来する

足音は 現前の後ろ側へ響き

頭の内に濃霧が湧き

運命は素通りする

結わえておいた時はほどけてしまった

濁った闇に運ばれる

棺のような私だ